

コーパスから見える統語的な変化 エストニア語の不定詞構文

松村一登 (東京大学)

kmatsum@l.u-tokyo.ac.jp

1. 言語資料と言語変化

基本的な前提：言語資料は、言語コミュニティにおける言語使用の記録されたものであるから、そこから、当該言語の変化やその変種に関する情報を取り出すことができる。

年代の隔たりのある2つの言語資料の間の差異 ≈ **言語の変化**

同時代の2つの言語資料の間の差異 ≈ **言語の変種** (地域的・社会的・使用領域的、等)

言語の知識としての文法：話者は、言語コミュニティの他の話者の言語使用を観察しながら、個人的な文法にたえず変更を加えている。話者たちが互いに非常によく似た文法を有し、また言語変化がコミュニティ内に広がるのは、話者間のこのような相互影響があるからである。

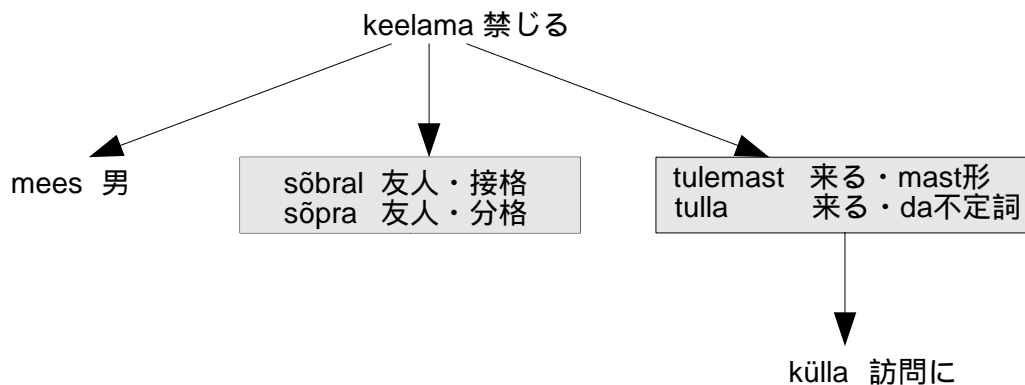
言語変化のモデル：言語変化は、言語コミュニティの一部の話者の言語使用において始まり、時間が経つに従い、次第に他の話者の言語使用に波及していく形で進行する。

文法の変化は、一定の条件を満たす文法的要素 (音韻、形態、語、構文など) に共通に起こるが、その条件を満たす要素が、同じ時期に一齐に変化を始め、同じ時期に一齐に変化を終えるわけではない。トークンのレベルで、従来の形式と新しい形式が併用される期間が続くが、変化が進行するに従って、新しい形式の使用される割合がしだいに増大し、従来の形式が事実上観察されなくなれば、その要素はタイプとして新しい形式に移行した (変化を終えた) ことになる。やがて、すべての要素が新しい形式に移行して飽和状態になると、この変化は完結し終了する。

言語史から明らかのように、変化はいつも完結するとは限らない。一部の要素が2つの形式の併用状態のまま、勢いを失って終息する変化もある。

2. エストニア語の不定詞構文

図1 文(1)の構造(依存構造)



(1) a/b. Mees keelas sõbral / sõpra külla tulemast. [Rätsep 78: 200]
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.ADE friend.PAR on_visit come.MAST

c/d. Mees keelas sõbral / sõpra külla tulla. [Rätsep 78: 196]
 man.NOM forbid.PAST.3sg friend.ADE friend.PAR on_visit come.DA

「男は友人に、自分を訪ねてくるなど言った」

3. エストニア語の動詞と名詞の形態

表 1-a エストニア語の動詞の不定詞形

ma 不定詞(辞書の見出形)	da 不定詞
paluma 頼む	paluda
tulema 来る	tulla

表 1-b ma 不定詞の変化形とその呼称 (cf. EKG-I: 65-66)

tulema	ma 不定詞(<i>ma-tegevusnimi</i>)	入格 (illative) [基本形]
tulemas	mas 形 (<i>mas-vorm</i>)	内格 (inessive)
tulemast	mast 形 (<i>mast-vorm</i>)	出格 (elative)
tulemata	mata 形 (<i>mata-vorm</i>)	欠格 (abessive)
tulemaks	maks 形 (<i>maks-vorm</i>)	変格 (translative)

表 2-a エストニア語の名詞の格 (文法格 grammatical cases)

主格(nominative)	sõber	友人(が)
属格(genitive)	sõbra	友人の / を
分格(partitive)	sõpra	友人を

表 2-b エストニア語の名詞の格 (場所格 local cases - 例: keel 「舌, 言語」)

	内部格(internal local cases)		外部格(external local cases)	
位置格(locative)	内格(inessive)	keeles 舌の中で	接格(adessive)	keelel 舌の上で
起点格(source)	出格(elative)	keelest 舌の中から	奪格(ablative)	keelelt 舌の上から
着点格(goal)	入格(illative)	keelde 舌の中へ	向格(allative)	keelele 舌の上へ

4. 「接格名詞句 + 動詞 mast 形」構文とその関連構文

- (2) a. 「行為・動作の遂行・継続を妨げる」: segama 「邪魔する」, vabastama 「解き放す」, võõrutama 「遠ざける」
 b. 「行為・動作の開始を妨げる」: hoiatama 「警告する」, hoidma 「保つ」, keelama 「禁じる」, pidurdama 「抑制する」, takistama 「妨げる」, tõkestama 「妨げる」
- (3) a. 接格 / 分格: aitama 「手助けする」, keelama 「禁じる」, käskima 「命じる」, laskma 「～させる」, lubama 「許可する」, paluma 「頼む」
 b. 接格: soovitama 「勧める」, võimaldama 「可能にする」

表3 「接格 + mast 形」とその関連構文の使われ方(その動詞と共に起るとされる構文)

	mast 形		da 不定詞	
	接格	分格	接格	分格
<u>keelama</u> 「禁じる」				
<u>takistama</u> 「妨げる」				
<u>segama</u> 「邪魔する」				
<u>hoiatama</u> 「警告する」				
<u>hoidma</u> 「保つ」				
<u>pidurdama</u> 「抑える」				
<u>tõkestama</u> 「妨げる」				
<u>vabastama</u> 「解き放す」				
<u>võõrutama</u> 「遠ざける」				
<u>käskima</u> 「命じる」				
<u>aitama</u> 「手助けする」				
<u>laskma</u> 「～させる」				
<u>lubama</u> 「許可する」				
<u>paluma</u> 「頼む」				
<u>soovitama</u> 「勧める」				
<u>võimaldama</u> 「可能にする」				

(Rätsep (1978), Tauli (1980, 1983), Kolsar (1984)による)

5. データ

表4 「接格 / 分格 + mast 形 / da 不定詞」構文の使われ方(記事コーパス, 1990年代)

	mast 形		da 不定詞	
	接格	分格	接格	分格
<u>keelama</u> 「禁じる」	35	33	426	5
<u>takistama</u> 「妨げる」	141	220	64	7
<u>segama</u> 「邪魔する」	42	69	12	1
<u>hoiatama</u> 「警告する」		18		
<u>hoidma</u> 「保つ」	1	68		
<u>pidurdama</u> 「抑える」		1		
<u>säästma</u> 「～なしですます」		7		
<u>tõkestama</u> 「妨げる」	2	2	1	
<u>vabastama</u> 「解き放す」		1		
<u>võõrutama</u> 「遠ざける」		1		
<u>käskima</u> 「命じる」			378	36
<u>aitama*</u> 「手助けする」			1976	114
<u>laskma*</u> 「～させる」			3268	316
<u>lubama*</u> 「許可する」			2199	71
<u>paluma*</u> 「頼む」			1989	355
<u>soovitama*</u> 「勧める」			1624	
<u>võimaldama*</u> 「可能にする」			1563	4

(* 標本集計に基づく推定)

表5 「接格 / 分格 + mast 形 / da 不定詞」構文の使われ方 (議事録コーパス, 1920 年)

	mast 形		da 不定詞	
	接格	分格	接格	分格
<u>keelama</u> 「禁じる」		7	5	8
<u>takistama</u> 「妨げる」		26	1	8
<u>segama</u> 「邪魔する」		1		
<u>hoiatama</u> 「警告する」				
<u>hoidma</u> 「保つ」		2		
aitama 「手助けする」			7	13
käskima 「命じる」			3	8
laskma 「～させる」			11	193
lubama 「許可する」			<u>44</u>	<u>22</u>
paluma 「頼む」			2	308
soowitama 「勧める」			1	
wõimaldama 「可能にする」			7	1

(アンダーラインは一般的な予測と合わない数字)

6. 考察

図2 mast 形と da 不定詞の使用頻度の比較 (3 動詞の場合)

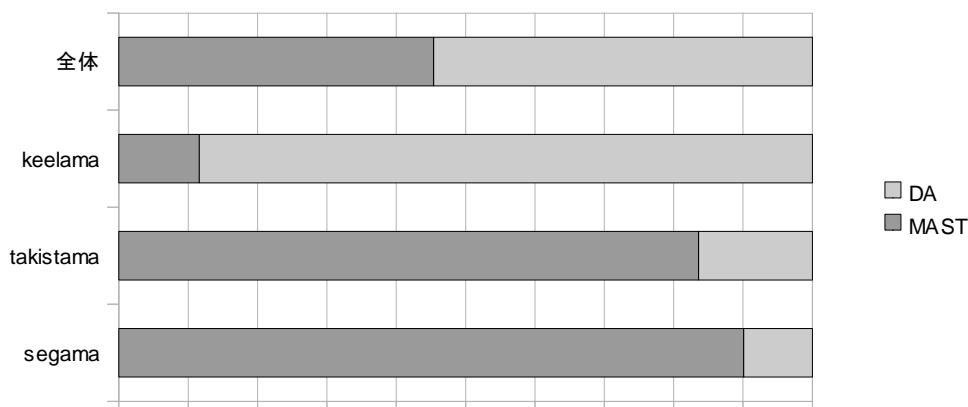
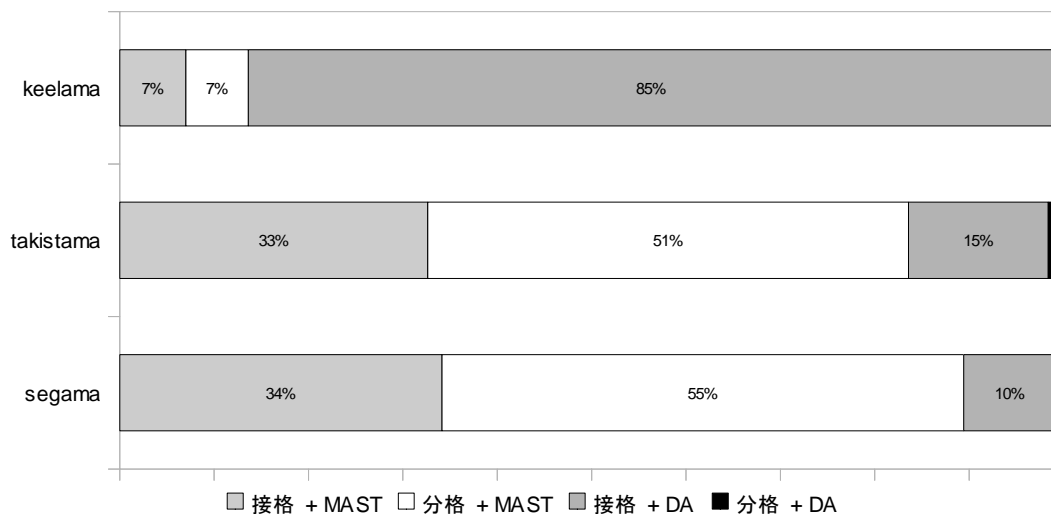


図3 「接格 / 分格 + mast 形 / da 不定詞」構文の相対的頻度

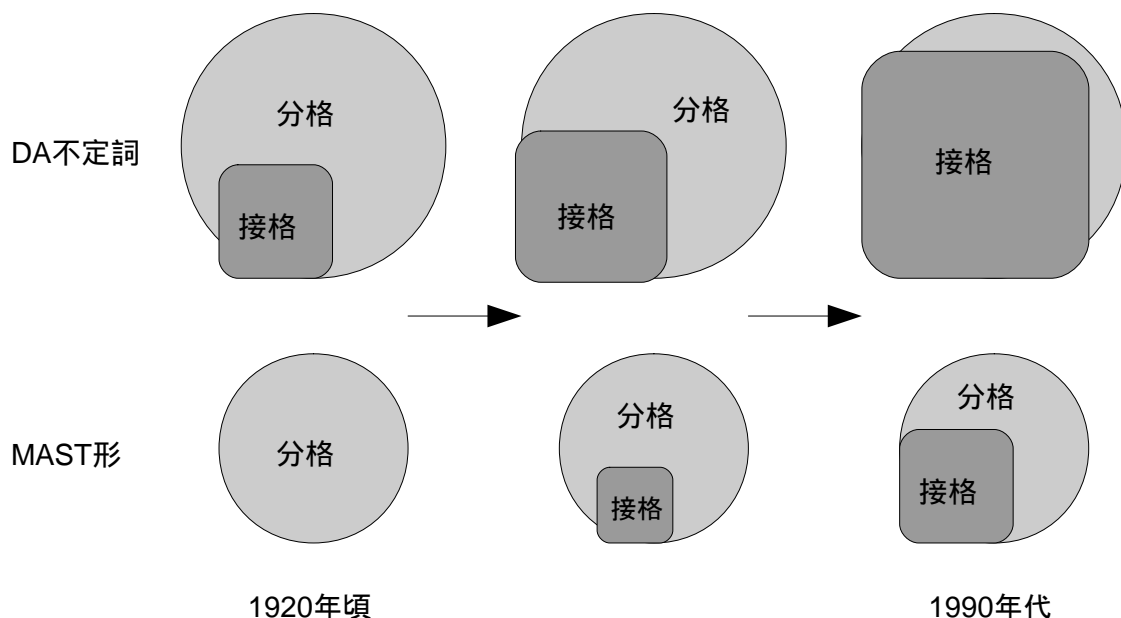


- [1] 現在のエストニア語(記事コーパス)で「接格 + mast 形」構文と共起する他動詞は、先行研究や文法書に書かれているように、おおむね keelama 「禁じる」、takistama 「妨げる」、segama 「邪魔する」の3つの動詞に限られると考えると大過なさそうである。[表 4]
- [2] 文法書等には書かれていないが、da 不定詞型の構文は、keelama だけでなく、takistama や segama とも共起する。ただし、keelama は主に da 不定詞と、takistama と segama は主に mast 形と共起する。[表 4, 図 2]
- [3] keelama は「接格 + da 不定詞」構文、takistama と segama は「分格 + mast 形」構文がもっとも頻繁に共起する不定詞構文である。[表 4, 図 3]
- [4] da 不定詞構文は、接格型が圧倒的に優勢。mast 形構文は、分格型が優勢である。[表 4]
- [5] 現在のエストニア語で「接格 + mast 形」構文は、「分格 + mast 形」構文や「接格 + da 不定詞」構文と競合するが、3 動詞のいずれにおいても最も優勢な構文ではない。[図 3]
- [6] 20 世紀の初めのエストニア語(議事録コーパス)では、不定詞構文は分格型が一般的(動詞 lubama 「許可する」は明らかな例外)。また「接格 + mast 形」構文の用例がない。[表 5]

7. まとめ

「接格 / 分格 + mast 形 / da 不定詞」構文をめぐっては、次のような言語変化が 20 世紀に起こったと考えられる。この変化は、現在もまだ収束していない可能性が高い。[図 4; 表 4, 5]

図 4 「接格 / 分格 + mast 形 / da 不定詞」使用頻度の歴史的変遷(イメージ)



- A) 20 世紀の初めと比べ、現在では、接格型の 2 つの構文(接格 + mast 形 / da 不定詞)の使用頻度が分格型の 2 つの構文(分格 + mast 形 / da 不定詞)に対して相対的に高まっている。
- B) da 不定詞では、接格と分格の交替は 20 世紀の初めからあり、当初、分格型構文が優勢だったと考えられるが、現在では分格型構文と接格型構文の勢力関係は逆転している。

- C) mast 形では，20 世紀の初め頃は接格型構文は用いられず，分格型構文のみだったと考えられるが，現在では接格型構文は分格型構文と交替する構文となっている。
- D) 「接格 + mast 形」構文は，1920 年代以降に生まれた比較的新しい構文と考えられる。

言語資料:

記事コーパス 日刊紙 Postimees の 1990 年代後半 5 年間の記事(3200 万語)

URL: <http://www.cl.ut.ee/korpused/>

議事録コーパス エストニア憲法制定会議議事録(1919–1920) (193 万語)

URL: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~kmatsum/kaken/index.html>

略号:	ADE	接格(alalütlev; adessive)	DA	da 不定詞(<i>da-infinitiiv</i>)
	MAST	mast 形(<i>mast-vorm</i>)	NOM	主格(<i>nimetav; nominative</i>)
	PAR	分格(<i>osastav; partitive</i>)	PAST	過去(<i>imperfekt</i>)
	3sg	3 人称単数		

参考文献

- Eesti keele grammatika I. Morfoloogia. Sõnamoodustus.* Tallinn: Eesti Keele Instituut, 1995. [EKG-I; エストニア語文法，第 1 巻，形態論・語形成]
- Eesti keele grammatika II. Süntaks. Lisa: Kiri.* Tallinn: Keele ja Kirjanduse Instituut, 1993. [EKG-II; エストニア語文法，第 2 巻，統語論]
- KOLSAR, Aili 1984. *Sekundaarse ma-, mas-, mast- ja mata-konstruksiooni struktuur ja tähendus.* Tartu: Tartu Ülikool. [Diploma thesis. 未公刊; 副次的な ma / mas / mata 形構文の構造と意味]
- MATSUMURA, Kazuto 1994. Is the Estonian adessive really a local case? *Journal of Asian and African Studies* 46/47 (1994), pp.223–235. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- MATSUMURA, Kazuto 1997. The dative use of the adessive case in Estonian: a corpus-based study. In: K. Matsumura and T. Hayasi, eds., 1997. *The Dative and Related Phenomena*, pp.31–79. Tokyo: Hituzi Shobo.
- MIHKLA, Karl, RANNUT, Lehte, RIIKOJA, Elli, & ADMANN, Aino 1974. *Eesti keele lauseõpetuse põhijooned I. Lihtlause.* Tallinn: Valgus. [エストニア語の統語論の概要]
- RÄTSEP, Huno 1978. *Eesti keele lihtlauseste tüübid.* Tallinn: Valgus. [エストニア語単文の文型]
- TAULI, Valter 1980. *Eesti grammatika II. Lauseõpetus.* Uppsala: Finsk-ugriska institutionen. [エストニア語文法，第 2 巻，統語論]
- TAULI, Valter 1983. *Standard Estonian Grammar. Part II. Syntax.* Studia Uralica et Altaica Upsaliensia 14. Uppsala: Uppsala University.
- 松村一登 1992. 「エストニア語の接格(adessive)について」 文化言語学編集委員会編 1992 『文化言語学』, pp.993–1008, 東京: 三省堂.
- 松村一登 1998. 「エストニア語」 『言語学大辞典セレクション・ヨーロッパの言語』, pp.116–133, 東京: 三省堂.